

復活の主イエスに 最初に出会ったマリア

ヨハネ20章11～18節

2021年4月4日

松田 基子 師

今日は、イエス様が十字架の死から3日目に復活されたことを祝う復活祭、イースターです。しかし、何故神の御子が十字架に架からなければ成らなかったのでしょうか。それが解る為には人間の本质が何であるかを、心底解らなければ理解する事は出来ません。ところで人間は自分たちの存在を、万物の霊長と考え、万物の支配者と位置づけていますが、これこそが、自分の命の与え主、創造主である神様への反逆であり、罪です。

この様に神様を無視して、自己中心に、自分を神として生きる生き方を、罪と呼びます。その事は、ローマへの信徒の手紙の3章10節から、次の様に記されています。

「正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。彼らののどは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。口は、呪いと苦みで満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲惨がある。彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない。」

これが人間の真の姿、本質なのです。しかし、その責任は重く、永遠の滅びに引き込まれて行く以外にありませんでした。

そのような人類をお見捨てになることが出来なかった人類の命の与え主である神様は、人類を憐れみ、救うために同じ心で人類を愛しておられる独り子を、人の子として、この世にお遣わしになりました。御子はナザレのイエス様として育たれ、神様の御心を人々に語り、愛を与え、神様の赦しを与えるために、その身に全人類の

罪を一身に負って、身代わりとなり、十字架に架かり罰せられ、罪を償い、人類の罪価を贖われたのでした。

その事は、イエス様が十字架に架かれた時、誰一人として解りませんでした。イエス様の弟子たちでさえ、解りませんでした。弟子たちはそれどころか、

『自分たちも捕らえられるのではないかと、ヨハネ以外は、皆逃げ去りました。イエス様の遺体を十字架から取り降ろして、香料を添えて、亜麻布に包み、新しい墓に葬ったのは、アリマタヤのヨセフとニコデモでした。』

そして、ヨハネ20章1節を見ますと、

「週の初めの日、(つまり、日曜日)朝早く、まだ暗い内に、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。」

とあります。マグダラのマリアはイエス様の女弟子です。マグダラは、ガリラヤ湖西岸にある町で、塔を意味しています。魚の塩漬け加工が盛んで、輸出もされていたそうです。マリアはその地の出身であったことからマグダラのマリアと呼ばれました。ルカ8章2節には、

「七つの悪霊を追い出していただいた、
マグダラの女と呼ばれるマリア」

と紹介されています。科学や医学が未発達であった古代においては、原因が分からない重い病や、心の病などは皆、悪霊の所為にしていました。イエス様はガリラヤ伝道で、そういう人達を癒されました。

マグダラのマリアも、その中の一人です。彼女は原因不明の重い病に長年苦しみ、肉体の苦しみばかりでなく、周りからの偏見や差別に、心も痛み、将来の希望も見出せず、人生に絶望していました。そんな時、人づてに、イエス様の事を耳にして、彼女は意を決してイエス様の許(もと)へ行ったのです。イエス様は彼女の病を癒して下さったばかりか、神様の愛の御心を教えて下さいました。彼女は、心身共に癒されたこ

とに、感謝が溢れ、以後、イエス様に奉仕することを自分の使命としたのでした。

彼女はイエス様の最後のエルサレム上りに、一行の生活に奉仕するために、ガリラヤからついて来ていました。思いもかけないイエス様の十字架刑に、

『イエス様の様な真実なお方が、何故十字架に架からなければならないのか』

と嘆き、彼女はどれ程、神様に助けを祈り求めたことでしょうか。彼女には成す術もなく、ただイエス様から離れないで、見守っている以外に何も出来ませんでした。彼女は、律法で外出が制限されている安息日が終わると、週の初めの日、日曜日の夜明けが待たなくて、まだ、暗い内に、イエス様が納められている墓地に急ぎました。

イエス様の墓の前に来ると、入口の石が取りのけてあるではありませんか。マリアはてっきり、墓泥棒の仕業だと思い込んで、この事を一刻も早く弟子たちに知らせなければと、走って行って、彼らに伝えました。彼女は2節で、

「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

と知らせています。

当時、何の目的だったのか分かりませんが、墓泥棒がいたそうです。それを聞いたペトロともう一人の弟子、(他の福音書では、ヨハネの名が記されています)2人は墓に向かって走りました。もう一人の弟子の方が、若くて足が速かったようです。墓に先に着いて、身を屈めて中を覗きますと、亜麻布が見えました。イスラエルの墓の多くは、岩山をくり貫いて小さな部屋を作り、石のベッドを置いて、遺体を寝かせていました。シモン・ペトロが到着すると、彼は臆せず、墓の中へ入って行きました。

ペトロはそこで、頭を包んでいた覆いと、体を巻いていた亜麻布はそれぞれ丸めて、別々のと

ころに置いてあることを見届けました。そこに、もう一人の弟子も墓の中に入ってきました。

8節には、

「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。」

と記されています。もう一人の弟子は、何を信じたのでしょうか。いくつかの解釈がありますが、ここは、マリアが報告に来た事柄が本当であったと、見て信じたという意味でしょう。

9節は、その理由として、

「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」

と受け取ることができます。そこで二人は、イエス様の遺体を探すのでもなく、家に帰ってしまいました。

マリアは遅れて墓に戻ってきました。誰もいない墓の外で、マリアは声を上げて泣きました。彼女は、心の底から悲しみがわき上がってきて、涙が溢れ出てきました。彼女は男性の弟子たちの様に、野心は全く無く、ただ、イエス様に自分の全存在を賭けて、仕えて来ただけです。掘り所が無くなってしまい、何も考えられないで、泣き続けたただけでした。彼女は確かめたいと思いで、泣きながら身を屈めて墓の中を見ました。

すると、イエス様の遺体が置いてあった所に、白い衣を着た、二人の天使がいました。マリアは驚いたことでしょう。彼らは、イエス様を寝かせていた、石のベッドの頭の方と、足の方にそれぞれに座っていました。天使たちはマリアに、

「婦人よ、なぜ泣いているのか。」

と問い掛けて来ました。マリアは自分の辛い思いを、

「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」

と訴えました。

そんなマリアですが、彼女はこれまで、イエス様の語られた言葉を一言も聞き逃すまいと、しっかりと心に蓄えていたと思われれます。イエス様

があのラザロを甦らせなされた時、ヨハネ11章25節で、

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」

と言われた言葉を知らなかったとは思えません。しかし、彼女は、墓という死の現実に向き合っている間は、マリアのイエス様は死んで居られました。

そんなマリアに、復活されたイエス様は、マリアの後方に立っておられました。マリアは人の気配を感じたのか、後を振り向きしました。しかし、彼女には、それがイエス様だとは分かりませんでした。イエス様は、

「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを探しているのか。」

と尋ねられました。マリアはその人を園丁だと思って、

『園丁なら、園内のことは何でも出来るのだから、彼がイエス様を運び出したのかも知れない。』

と咄嗟にそう思ったようです。

「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えて下さい。わたしが、あの方を引き取ります。」

と、大胆な申し出をしました。

マリアのイエス様はまだ、死んだ儘(まま)です。イエス様の遺体をマリアが運べる筈(はず)がありません。マリアに問題を解決する力は無いのです。そんなマリアの心の覆いを取りのけようと、イエス様が、彼女の名前を呼ばれました。

「マリア」よ、

その声は聞き覚えの有る、懐かしい声でした。マリアは身体ごと振り向いて、真っ直ぐイエス様に向かうと、

「ラボニ(先生)」と、

これまで、親しくイエス様をお呼びした呼び方で、呼んで、嬉しさのあまり縋り付いたようです。マリアは復活されたイエス様にやっと気がつきました。

マリアは死の墓から復活されたイエス様に向

かって向きを変えた時に、イエス様の復活に気付きました。イエス様は、喜びの余り縋り付いて来たマリアに、

「わたしにすがりつくのはよしなさい。」

と言っておられます。注解によりますと、マリアは喜びのあまり、イエス様に縋り(すがり)付いているのです。そこでイエス様は、

『わたしに縋り付いているのを止めなさい。』と言っておられるのです。何故でしょうか。

「まだ父のもとへ上っていないのだから。」とあります。

イエス様の真の栄光は何でしょうか。神様の人類救済のご計画である、神の御子の価値ある身を、十字架に架けて、罪を贖い、救いの道を開いて、御業を成し遂げられたなら、再び永遠の世界に戻り、神様の右の座に着かれることです。イエス様が天に帰られなければ、聖霊は降って来られないのです。イエス様は16章7節で、

「実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。」

と言っておられます。

そして、14節に、

「その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。」

と言っておられます。イエス様は復活なさいました。しかし、それは、ラザロの復活のような蘇生ではありませんでした。永遠の御国で神様の右の座に座すための、霊の体に復活されたのです。霊の体と言うのは、あのエマオの途上の、二人を見ると、最初、彼らはその目が遮られて、心が鈍くなっていたために、それがイエス様だとは分かりませんでした。マリアもイエス様の遺体を求めている間は、復活のイエス様だとは分かりませんでした。復活の体、霊の体は、地上の生を越えた永遠の霊の世界まで通じる体です。そこにはその事を信じる信仰の目が、必要だと

いうことを言っているのです。

イエス様はその霊の体をもって、天に帰られるのです。イエス様はマリアに、17節で、

「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。

『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る。』

つまり、イエス様が、十字架に人類の罪の贖い(あがない)を成し遂げて、天に上り、神の右の座に着座される事によって、イエス様を信じる者に、神の子の身分が与えられ、イエス様を通して神様を。

『お父さん』

と呼ぶ事が出来るようになり、イエス様は聖霊によって、何時も共にいて愛を注ぎ、導きを与え、御国へ至るまで導き続けて下さるのです。

ですから、マリアはもうイエス様をつかまえておく必要はないのです。それに、彼女は、イエス様からの伝言を弟子たちに届けるために、何時までもイエス様に縋り付いて居てはいけないのです。彼女はイエス様に促されて弟子たちのところへ行き、

「わたしは主を見ました。」

と告げました。詳訳聖書では、

「主にお目に掛かったこと、また、主がこのように彼女に言われたことを知らせた。」

とあります。

マグダラのマリアも、弟子たちも、イエス様が16章8節で、

「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。」

と言われた通り、聖霊降臨によって、聖霊に教えられて初めて、自分達の罪の深さは、神の御子を十字架に付けるほど重いものである事が解りました。そして、イエス様の十字架の贖いの愛と、神様の赦しの保証であるイエス様の復活に感謝が溢れました。

そこでかれらは、この真理を世界に向かって宣べ伝えずにはいられなくなったのです。私達の信仰は、イエス・キリストの十字架と復活の事実に掛かっています。 イースターのこの日、私達もイエス・キリストの十字架と、復活を信じ、自分の全存在をイエス様に賭けて、信じぬいて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

イエス様が、私達の存在を滅ぼす罪を一身に引き受けて、十字架に贖いを成し遂げて下さり、復活に依って、罪の赦しの保証をお与え下さったことに、何と御礼を申し上げて良いか感謝に溢れます。

神様はそればかりか、イエス様を信じる者に神の子の身分を与え、

『天の御父様』

と呼べる者として下さった事を、心から感謝致します。

この恵みを自分だけのものにせず、福音を宣べ伝える者として下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。